

**カナダ・モントリオール大学における教員研修
—日本のフランス語教育における実践の可能性—
Bilan du stage au Québec 2011**

土屋 良二, TSUCHIYA Ryoji, Université Tsuda

小板橋 淳, KOITABASHI Jun, Lycée Jeunes Filles de Sumanoura

水野 いずみ, MIZUNO Izumi, Université Doshisha

西川 葉澄, NISHIKAWA Hasumi, Université Sophia

吉澤 英樹, YOSHIZAWA Hideki, Université Seijo

はじめに

私たち日本人スタジエール5名は2011年のケベック・スタージュに参加した。ここでは、ケベック・スタージュの内容について紹介するだけではなく、私たちが体験した教育プログラムの特徴についていくつかの視点から分析し、ケベック・スタージュで学んだことを日本のフランス語教育の現場でどのように生かすことができるかということについて考えてみたい。

1. ケベック・スタージュについての概要

2011年7月25日(月)から8月12日(金)までの3週間、Stage en didactique du français, culture et société québécoises が Université de Montréal で行われた。今回の参加人数は私たち日本人5名とモンレアル市在住のフランス語教師3名の計8名であった。月曜日から金曜日の午前が教授法の授業で、午後にはアトリエなどが組まれている。初日はスタジエール全員の初顔合わせやMRI(国際関係省)から支給される生活費(300\$CA)の受取り、学生証発行などの諸手続きで終わる。翌火曜日朝に講師やスタッフとの顔合わせを兼ねた朝食会が催され、その後本格的に授業が始まった。一方的な講義というよりも、全体あるいはグループに分かれて話し合い、意見交換を行うという形態であった。これは今回のスタージュが少人数だったからこそ実現可能であった授業形態ではないだろうか。「グループによる協同作業」と

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

「documents authentiques を用いた授業」を組み立てるための方法論を身につけることがスタージュの基調となっていた。実際にグループに分かれて何らかの *activité* を考える際に使用するのも *documents authentiques* であった。

スタージュには *travail individuel* と *travail en équipe* という2つの課題が設けられている。いずれも *documents authentiques* を使用することが前提であり、*travail individuel* はモンレアル市内で入手可能でしかもケベックに関する内容の印刷物を用いて教案を作成するというものである。対象クラスの明確化、「導入・展開・まとめ」の3段階で授業を構成、時間配分の明記などの条件を踏まえた上で指定枚数内の教案を提出する。*travail en équipe* はグループに分かれてケベックに関する *documents authentiques* を用いて授業を組み立てなければならない。こちらの課題は最終日の午前中に実際に模擬授業の形で発表した。

午後のアトリエはケベック文化に触れる貴重な機会であり、ケベックの言語・歴史・文学、シャンソン、映画、IT など内容が豊富であった。校外活動は市内観光、植物園見学、専門書店巡り、ケベック・シティ訪問などが企画されていた。

ここでスタッフについて紹介しておこう。スタージュ主催者側代表 *Suzanne Fradette*、教授法の授業は *Denyse Hayoun* が担当。午後のアトリエは様々な講師が各自の専門分野を担当。校外活動のコーディネーターは *Jean Duchesneau*、私たちに同行して案内してくれる専属スタッフもいる。(敬称略)

2. スタージュの特徴

このスタージュの特徴はまず、授業の構成とその展開にある。午前中の3時間半の全ての授業を同じ講師(この年の担当 *Mme Hayoun* はアルジェリア生まれのフランス人、現在はカナダの大学で英語話者にフランス語を教えている)が担当する。日替わりで授業のテーマ(クラスを活性化する技術、学習ストラテジー、読解、*documents authentiques*、協同学習、作文と文法、語彙、聴解、TICE、文化と外国語教育、評価、発音)が設定され、教師として授業を構成するための総合的な視野を養えるようになっている。ケベックのフランス語学習者はカナダだけでなく北米全土の英語話者、その他の地域からの英語を話す移民、英語を話さない移民、留学などでやって来る外国人などであり、フランス語教育は外国語教育であると同時に第二言語教育でもある。それゆえこのスタージュのアプローチは英語圏にあって第二言語教育に重きを置くケベックならではの実践的なものと言えよう。授業テーマに関する大量の資料がスタージュ初日に配布され、その内容に関するディスカッションから始まり、理論を把握し、個々の授業でどのように実践していくか、その応用方法の考察へと授業は展開する。グループワークが重視され、毎回様々な人数のグループで課題に取り組む。研修参加者が相互に意見交換を繰り返すなかで、フランス語教員としての共通認識・連帯感が育つ仕組みである。また模擬授業の課題にはケベックの文化、社会的側面を表す *documents authentiques* の使用が求められ、資料の選択と授業の構成の中で、フランコフォニーへの意識も高まるようになっている。課題の特徴はストラテジーと協同作業にあるだろう。個人の課題では *activité* をいかに構成するか、*pré-lecture*, *activité*, *post-lecture* という3段階の手順の意識化によって、学習者の注意を学習目的に集中させ、より効果的に学習活動を進める方法が求められる。また、グループの課題では課題実現のためにどのように役割を分

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

担し、全体を完成させるか、メンバーの協力の姿勢が問われることになる。

もうひとつの特徴は成績評価方法の公開にある。個人およびグループでの課題（各 40%）授業参加の姿勢と午後の講義への参加（各 20%）となっており、各課題においても評価基準が数値化されている。またスタジエールの自己評価もあり、北米英語圏の授業評価方法の影響を受けている。

3. グループワーク

ケベック・スタージュにおいて重点が置かれていたグループワークについてさらに論じたい。グループワークの重要性が特に強調されていたためである。

もちろんフランスにおいてFLEにおけるグループワークは、コミュニカティブ・アプローチ以来、基本中の基本であり、「外国語で他者とコミュニケーションをとれるようになる」という目的で、学習者を2人、または3～4人のグループに分けてactivitéを行うことが教員に指導されてきた。一方、教員養成においてグループワークが課題の条件として取り入れられているかということ、長期のFLEの教員養成プログラム¹においては、グループ単位で教材を作成し、その教材の作成意義や分析等を論文形式にまとめる課題に大きな比重がおかれるが、夏季スタージュのような短期の教員養成においてグループワークによる課題が義務付けられる例は、筆者の知る範囲ではないように思われる。フランスのスタージュは規模が大きく、授業の履修方法が選択制であるなど、そもそもシステムが異なるためでもあるだろうが、ケベックにおけるグループワークによる課題への比重の高さは注目に値する。おそらくその理由として、協同学習の理念と実践が北米の教育機関において深く浸透しているという背景と関連があるだろう。このスタージュでは、グループワークの理論だけでなく、教員が実際にグループワークに参加することを通して、その重要性や効果を体験し、実感するに至ったといえよう。筆者は授業において10年以上グループワークを援用してきたが、今回の体験により、その効果についてさらに実感を深めることができた。そのため、コミュニカティブ・アプローチを採用したことのない教員にとっては、ケベック・スタージュで得るものが非常に多いのではないかと思われる。

今回のアトリエではグループワークの効果を体験する一例として、聴覚による語の記憶の際に、「一人で覚えられる語数には限界があるが、グループで記憶を共有すると語彙数が倍増する」という体験をしていただいた。また、実際に授業で体験したグループ作業による読解の教案作成の例も紹介した。

4. 文化をどう扱うか？

スタージュの名称にも入っているように、ケベックの文化について学ぶことはフランス語教授法の習得とともに、この研修の重要な目的の一つである。外国人がケベック文化に触れる機会をつくることは、英語圏の北米にあって数少ないフランス語圏の存続を賭けた真剣な試みではあろう。また、スタージュにおいてそれはフランス語教育のフィルターを通したものとして提示されており、それが大変有意義な

¹ 例として、パリ第三大学でなされていた DUDL (Diplôme Universitaire de Didactique des Langues)。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

ものを感じられた。

今回のアトリエでは、実際にスタージュで使用されたケベックのバンド Mes Aïeux の楽曲 *Dégénération* (2004) のビデオクリップを用い、グループワークを通してそこから読み取れるケベックのイメージについて挙げていただいた。さらにその後、やはりスタージュで使用された 2006 年から放映されているケベックのホームドラマ *Pure Laine* の一部を紹介した。以上のように、伝統的価値観の崩壊に直面する現代ケベックの状況に対して対照的な態度が読み取れる二つの例を参加者に体験していただいた。

スタージュでは、事前に配布された論文を読み込み、「文化とはなにか」と問うディスカッションを通して、文化そのものの捉え難さについて認識を共有することから出発した。「文化は静的なものではなく生成していくものだということ。それも通時的のみならず共時的にも生成していく」のである²。「文化」と一口にいてもその内か外か、または内部にあってもどこに視点を置くかによって見える風景は全く異なる。そのことを踏まえ、スタージュではケベック文化について一元的なイメージが形成されるように誘導することなく、解釈を開くように工夫されていた。

FLEの視点からみたこの体験の重要な点は二つある。まず、ケベックで触れたあらゆるものが貴重な *documents authentiques* であり、言語を通して新たなフランス語圏の「文化」を知り、今後の教室内での活動に広がりを与える類まれな機会となったことである。しかし、より重要なことは、「自律した学習主体」として学習者を扱い、学習対象言語を介在させ、彼らを一方的に教師が誘導するのではなく、単純な答えのない問題を考えさせるという FLE の重要な教育理念がスタージュでは「文化」というものを学ぶ際にも徹底されていたことであろう³。

5. 私たちの協同作業とフィードバック

私たちはケベック・スタージュにおいて教室内で協同学習の活動をどのように展開するかということについて体系的かつ実践的に学んだ。今回の私たちの発表もこれらの学びの延長上にある協同作業であると同時に、現地スタッフ、スタジエールの支援を得て、ケベック・スタージュの臨場感をアトリエでお伝えしようとする試みでもあった。この論考において展開されているケベック・スタージュの分析そのものがまさに私たち日本人スタジエールのフィードバックであるが、それに加えて、いくつかのコメントを紹介しておきたい。「知っていることを一方的に教えるのではなく、学習者が自律的に学びへと向かうことができるように補助する役割の重要性に気付いた。」(吉澤)「体験を通して理論を習得するという面が優れており、グループワークや教材作成、教案作成の課題をするにあたって新たに学んだことは多かった。」(西川)「グループ作業をさせる際に、各学習者の役割をより注意して観察するようになった。グループの作り方、段階を踏んで *activité* をさせる方法などは、フランス語の授業だけでなく、教授法の授業でも役に立っている。」(土屋)

² Marie-Françoise NARCY-COMBES, « Enseigner une culture étrangère », in *Précis de didactique. Devenir professeur de langue*, Paris: Ellipses, 2005, p.120. [ISBN: 2-7298-2022-1]

³ アトリエにおいて、岩田好司先生 (2010 年度ケベック・スタージュ参加) から、この方法論こそが「知識」というものを構築主義的視点から考える北米の教育法の影響を色濃く反映したケベック・スタージュの特色であるとして指摘いただいた。

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2012

« Le stage m'a permis de prendre conscience de l'importance du travail en équipe dans une classe de langue. Le fait d'avoir dû travailler en équipe moi-même m'a aidé à comprendre que cet exercice était stimulant, enrichissant et créatif. » (Carmen CRISTEA)

最後に、発表の準備段階において、スカイプ映像・録音・文書など、様々な通信手段を利用してケベック在住のスタッフ、スタジエールに御参加いただいたことに心より感謝したい⁴。このような協同作業を通じて、ケベック在住のスタッフとスタジエールの間の交流がさらに深まり、ケベックと日本をつなぐ「学びのコミュニティづくり」を体験することができた。このような協同作業のダイナミズムを味わうことができたことがケベック・スタージュの醍醐味であったと考えている。

アトリエで紹介した音声、映像等を以下に記す。(敬称略)

音声によるスタージュ紹介 (スタージュ主催者側代表 Suzanne FRADETTE)

スタージュ紹介文 (教育法の講義担当 Denyse HAYOUN)

ビデオ映像によるスタージュ紹介 (映画・IT 関連の講義担当 Emmanuel POISSON)

映像によるフィードバック・コメント (現地スタジエール Marjan, Carmen)

論考執筆担当部分およびアトリエの発表の準備段階における作業分担

	小板橋	土屋	西川	吉澤	水野
論考	1.概要	2.スタージュの特徴	3.グループワーク	4.文化	5.共同作業とフィードバック
アトリエ準備	論考編集	代表	パワーポイント編集 ブログ作成	レジュメ編集	インタビュー収録 録画編集

おわりに

ケベック・スタージュを通じて私たちはグループ活動の大切さを体験的に学ぶことができた。帰国後、関東と関西という地理的な隔たりを乗り越えて協同で準備を進めてきた今回のアトリエの発表もスタージュで学んだことの実践に他ならない。その後も、私たち参加教員はそれぞれこれらの学びを活かすべく日々の授業の中で試行錯誤を繰り返している。最後に、私たちが作成したケベック・スタージュに関するブログのアドレスを紹介しておきたい。http://d.hatena.ne.jp/stage_de_quebec/これからスタージュに参加したいと考えている方々の御参考になれば幸いである。

⁴ Nous tenons à remercier vivement Mme Suzanne FRADETTE qui a bien voulu présenter un appel aux participants des Rencontres Pédagogiques du Kansai, ainsi que Mme Denyse HAYOUN et M. Emmanuel POISSON qui ont bien voulu présenter le programme du stage. Nous remercions aussi les anciennes stagiaires, Mmes Marjan ALIPOUR et Carmen CRISTEA qui nous ont fait parvenir les compte-rendu du stage.